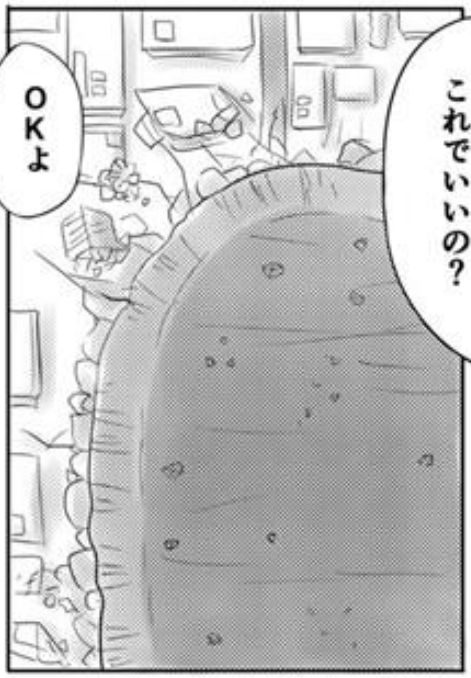
天真爛漫
ギガンティック
3
TOUHOU PROJECT+SIZE FETISH FAN BOOK
Pachudanald's
この本には
読む人によっては
残酷な表現や不快な
表現が含まれています。

ズドォォォォ


OKよ

パチェ、これでいいの？
簡単に潰れちゃったけど…
バラ
バラ

しかし、フランの破壊衝動を抑えるためとはいえ

こんなので大丈夫なのかしら

ゴゴ

ゴゴ

おそらく大丈夫なはずよ

カメラ記

雨を降らせて閉じ込めておくと館が破壊されるし

ボゴォ

スペカ禁止魔法をかけておくと何かのはずみで解けたとき何があるか分からないし

そこでスペカ禁止にしておいても破壊欲求を満たせるのが今回の方法というわけよ

室内を魔法で広げてるから日光とかの心配もいらないわ

ご都合主義

終

幻想郷

なるほど
しかし
よく出来てるわね

そりゃ本物だもの

数多ある世界線から
いずれ滅んでしまう都市を
持ってきてあるの

なるほど、わからん

↑PICK UP!

小さすぎて見えないかも
しれないけど
ちゃんと人だっているのよ

へえ

スペカを使わなくても
楽しめるサイズにしたから
たとえ裸足で踏んでも
大丈夫だと思うわ

ふーん、じゃあ試して
みようかしら

とはいえ
刺さったりしないか
少し不安だったり…

そうだ、
これで試してみよ…

ぬいだ

フワッ

ズウウウン

うわぁ、
靴下だけで潰れちゃうなんて
ホントに脆いんだ
これなら…

フランも使うわけだし
姉として確かめておかないとね

ほーら、レミリア様のおみ足で
踏み潰しちゃうわよー

ゴガガガガ

あっ
なんだかくすぐったい

グシャ

クシャ

プチッ

なるほどねぇ
これは気持ち良いかも

ふふっ
たったの一歩なのに
物凄い破壊力ね

パラ…

パラ…

ほらほら、早く逃げないとすり潰されちゃうわよ
ズガガガ
ふふっ、私は足を少し前にずらしているだけなのに…滑稽ね

それにこうやって軽く踏み出すだけで
たくさんの建物と数百人が
ズグシャアア
私の足の下敷きになっちゃうし
…なんだかむらむらしてきちゃった…
ゾクゾク

どうせパチェしか見ていないし…
ちょうど良さそうなモノもあるじゃない
ちょっと愉しませて貰うとしましょうか…
スル…

いやー、意外と良かったわー
お疲れ様レミィ
ああいう行為は予想外だったけど
そういう欲をかきたてる効果があるのかもしれないわね
これならフランも満足できるかもしれないけど
これだけの魔導設備、作るのに結構お金かかったんじゃない？
そうね…
でも問題ないわ これから回収するし
レミィ、世の中にはでっかい女の子に萌えるフェチがあってね割と需要があるのよ
そういうわけで街の中にいくつかカメラを仕掛けておいたの
!?
おかげでバッチリよ
あ…♡
このビルっていうの中々…♡
パチェェェェェェェ
おわり

今ちょっと忙しいから…
紫様！
カチャ
カチャ
紫様ー少しはお掃除手伝ってくださいよ
慌てない慌てない
ガサ
ガサ
邪魔しないでください！
ゴロン
堅いこと言わないの…ん？
さわ
さわ
さわ
さわ
最臭兵器藍の足
寺田落子

…

くんくん…

おええぇ！！

ガーン

なっ！

流石に失礼ですよ！！

たんまたんま

イイカンジの消臭アイテムあげるから許して

ぐぐぐ

ぐぐぐ…

ガッ

何だあのポーズ…

足入れるだけで消臭マシーン！

…

パッ

足突っ込んでみ
ほんとかな……
ブラ
ブラ
まぁ、やってみるだけなら…
つめたっ
ピトッ
ズオオオ
ずぶ
あ
中は良い感じに涼しいのね
ゴゴゴゴ

足の裏を擦り付けるんだっけ…

ズシャアアア

プチ プチ ぐしゃ ぐしゃ

あ！何だかムズムズする

ドォオン ズドォオン ドォン

古い角質食べる魚みたいなのが居るのかな？

冗談半分だったけど何だか大変なことになっちゃったぞ

じー

ダゴゴゴゴゴ…

数日後

紫様！この前のアレ良いですねたまに使ってますよ

えっ！

まあいいか知ーらない

バッ

マニア向けにビデオが売れるし

新作の超巨大妖怪狐娘だよー

ワイ ワイ

巨

新作

おわり

フフフ いるいる
変態君たちが いっぱい
ペロッ

NHK風↓
みんなげんき? てゐだよ〜っ
ん
ず
今日はみなさんにぃ… 幸せを届けにきたんだよーっ
嬉しいでしょ

な、なんだよあのデカ女
何する気だよッ
物騒な事するんじゃ ねえだろうな!
ワァァァァァ
もーっ 照れなくても いいのにさー
私知ってるんだよ? お兄さん達さ、凄く好きでしょ
ゴクリ。
足フェチ
尻フェチ
足フェチ
足フェチ

じゃあお兄さん達に
幸せ授けまーす
ズズッ
ボキ
ボキ

おいっ　あいつマジで踏みにきたぞ
三郎が下敷きに！
あいつ喜んでたろ
気にすんな！
早く逃げろ！

あーっ
聞こえてるよー
逃げちゃダメッ
クスクス

悪い子は閉じ込めちゃうよぉ
ずずぅーー
ーっ
ボキ
ボキッ

フフン
ちょっと溝を作ってあげるだけで…
お兄さん達じゃ越えられないよねぇ
ゴゴゴゴ
ずずぅーっ
可愛いよお
フフフ、今度はねぇ
ゴオオオオオ

すわっちゃお
その辺にいると危ないよ～
ズドン
ホラね
って逃げられないかぁ
お兄さんたち
チビだもんねぇ
ズッシャッ
ん～…
なんだかモゾモゾして
こそばゆいよ♪
ずんっ
ドン
ドン
さてさて
よいしょっと
ずずっ

ホラホラ、頑張って逃げて～
ぎゅうっ
てゐいも虫だよぉ
モタモタしてると捕まえちゃうからね♪
アハッ
ちゃんと楽しませてくれた子にはごほーびあげちゃう
つーかまえたっと

こんな所で挟んじゃったり

ギュウウウ

あはっ

じたばたしてるねー

じたばた

ぐぐっ

ぴくぴく

幸せでしょ？

他の皆も心配しないでね

てゐおねーさんが幸せにしてあげるから

えへへ…

可愛い寝顔

ふふふ。

……

すの笑顔が不安。

FIN.

ナイトメアガール

作：レヴァリエ
挿絵：蒼凪　依翅

眠っている間に行われる記憶の整理は、時として心理現象を伴う。それは現実にも似て、ともすれば普通の人には現実との見分けすらつかないもう一つの世界を紡ぎ出すのだ。

夢。

なんだ夢か。夢でよかった。覚めて初めてそう気づくことも決して少なくはあるまい。どんなに荒唐無稽な世界がそこにあろうと、夢を見ている間はそれに疑問を抱かない。夢の世界にいる間は、そこの世界に生きるしかないから他の価値観が混ざれないのだ。

けれど夢は現実とは違う。覚めれば消えるし、共有されない。いわばオフラインだ。自分の見た恥ずかしい夢は誰にも口外されることはないし、夢の中で何をしようと咎められはしない。勇者にも魔王にもなれる。

逆に、もし夢が他人の夢と繋がっていたら。それはもう一つの現実と呼べる世界を紡ぎ出すのではなかろうか。

死ねば終わる現実と、覚めれば終わる夢。そこに他人がいて、自分の行動は他人に影響を及ぼすとしたら。現実世界と何の相違があろうか。いや、あるまい。

もちろん、それを実現するには超心理学だテレパシーだなどと、眉唾物の話を真面目に研究し実験を繰り返さねばなるまい。

夢を束ねて現実を織り成す。まさに、科学の及ばぬ夢物語の世界。

けれどそれをすることが出来る少女が一人。幻想世界で眠りに落ちる。

現実世界での記憶がほとんど無い少女が、夢の世界に目を覚ます。無意識を操る力を持ちながらにして、無意識に支配された少女。そんな彼女が唯一自由であれる世界が、この夢の世界であった。

真っ暗だ。何も無い闇の中に、少女の翠がかった銀髪が宝石のように煌いている。けれど、その少女はまるで寂しそうではなかった。

なぜなら彼女は、創造主なのだから。

古明地こいし。無意識を操る程度の能力を持つ彼女は、無意識の産物である夢を自由に操ることが出来る。即ち、どんな世界だって自由に作り出せるのだ。

こいしが願うと、世界はその思いに敏感に反応し形を変える。まずは空が広がり、そして大地が広がる。闇の覆っていた無の空間は一瞬にして澄み渡った青と、土の色に二分された。こいしは人形のような整った顔に、満足そうな笑みを浮かべて辺りを見回す。

そして彼女は次に街を思い描いた。かつて八雲紫に見せてもらった外の世界の街。赤や青、様々な色の屋根を持つ家々が立ち並び、その間には石のような物質で舗装された道が張り巡らされている。

何も無い大地に街が広がっていくその様は、人間の開拓の歴史を早回しで見ているみたいで目に楽しい。

丘陵が隆起し、木が生えて林になり、川は家とそれらの間を縫って流れる。郊外には畑が広がり、そのはるか向こうには大気に霞む山脈が雪をかぶって荘厳に佇んでいる。夢の中とは思えない完成度、リアリティを伴って生み出された絶景は、まさに現代日本の姿それそのものだ。

ただし、その町はこいしから見てだいぶ小さかった。およそ1000分の1といったところだろうか。足元を見れば、可愛らしいブーツの淵に傾いた家々がもたれかかっている。ブーツから伸びる地割れが小さな家を飲み込んでいるのも伺えた。

けれど、こんなんじゃぁつまらない。これではただ、1000分の1のジオラマの中に立っているのと何も変わらないのだから。

やっぱり、付き合ってもらわないとつまらないのだ。大勢の、ゲストたちに。

無意識を手繰り寄せる。科学の成しえない幻想の業を、少女はなんのことなくやってのける。眠ってさえいれば相手は誰でもいい。どうせ現実世界での立場なんて、夢の世界に来た時には忘れるのだから。

彼らはゲストにしてキャスト。夢の世界に入り込んだ瞬間、心の底からこの世界の役を演じることになるのだ。別人として過ごす、でも間違っていないかもしれない。

こいしの脳に、何千、何万もの人々の無意識がリンクする。

誰もいなかった道路に、うっすらと重なるようにフェードインする人々。夢の始まりとは往々にして曖昧なもので、人々はまるでずっとこの世界にいたか

のように錯覚する。突然現れたのは人間たちのほうなのに、彼らからすればこいしの方が突然出現した、という感覚に陥るであろう。
だから、彼らはこの世界に現れると同時に酷いパニックに陥った。
腰を抜かすもの、もつれる足で必死に逃げ出すもの、あるいはただ呆然とこいしを見上げて佇むもの。
そんな人々を、こいしは愉しそうに見下ろして笑いかけた。
「ふふっ、ようこそ！　わたしの夢の世界へ。目が覚めるまで、最高の悪夢を楽しんでいってね」
誰にとも無く町に向かって手を振り、にっこりと微笑んで町を覗き込む。それだけで、彼らの注意をひきつけるには十分であった。
なにせ、彼女が膝に手を当てて可愛らしくかがむと、その動きが足を伝って大地へと伝播し、立っていられないような激しい揺れを引き起こすのだ。そしてその桜色の唇が紡ぎ出す言葉は空気の壁となって、鼓膜を、臓腑を震撼させて通り抜けていく衝撃波。可愛らしく甘い声が、威力抜群の音響兵器となって街を凪ぐ。
こいしはセミロングの銀髪をくりくりと指でいじくりながら、暫く町の様子を観察していた。
大きな音というのは無条件に恐怖を呼び起こすものらしい。ただ呆然と立ち尽くしていた人々は縮こまり耳を塞ぎ、そして慌てて逃げ出そうとする。情けないかな、中には失禁しているものもいるようだ。
軽く挨拶しただけなのに、こんな有様である。それが面白くて、こいしはさらに彼らを煽ってみることにした。
「がおーっ、怪獣さんだよ～！」
こいしは両の手をぐわっと上に上げて、逃げ惑う人々の背中に向かって声をかけた。
すると、その中のいくらかはやめとけばいいのにこいしを振り向き、そして盛大に地面を転がる。持ち上げられた手、そのあまりの大きさに遠近が狂い今にも押しつぶされそうな錯覚に囚われたのであろう。
「えへへ、どうだ！　びっくりした？　びっくりしたでしょう？　可愛いなぁ、そんなに慌てちゃって」
こいしは手を下ろすと、地響きを立てて立ち上がった。可愛らしいショートブーツの下敷きとなってバキバキと崩れ行く住宅の悲痛な断末魔が、彼女の影に覆われた町に鳴り渡る。それは雷鳴のような轟音であり、そしてそれよりも高く耳につくものであった。
当然、その音はこいしの耳にもしっかり届き、彼女の脳をびりびりと刺激する。Ａ１０神経に火花が走り、ドーパミンが放出されるのがはっきりと分かるほどに。
「あはは、私の足の下でおうちがつぶれちゃった！　なんだかとっても愉しい！　あのね、あのね！　サクッ、って感じ！」
座った時にめくれ上がったスカートを正そうともせず、こいしは足を持ち上げた。
こいしのそれは天を突くような巨塔のようであったが、しかしそう形容するのは無粋。
あの千メートルを超える巨体を支えるその柱は華奢でほっそりとした女の子の足なのだ。白くなだらかな美曲線を描く脹脛。そのまま視線を上へと辿っていけば、スカートの中の暗がりへと吸い込まれていく締まった太股。
余計な脂肪も筋肉も一切無くしなやかで、ついつい抱きしめたくなるような見事な脚。二次成長期を直前に控えた十代前半のすこし若すぎる――けれどもとても可愛らしい脚であった。
そんな脚が、大気を引きずって持ち上がる。
「さっきの、気持ちよかったぁ……。もっとあなたたちの町を踏み潰したくなっちゃった。ねぇ、いいよね？」
こいしは頬を紅潮させ、唇に人差し指を当てて可愛らしくねだる。もちろんそれに答える者は誰一人としていなかったが。
「どこにしようかな～！」
返事を聞かずして、こいしは持ち上げた足を町の上に翳してぷらぷらと揺らす。
こいしにとっては、ただそこにいる人々の恐怖を煽っただけ。けれど、彼女のブーツの下では、彼女の想像を絶する惨事が巻き起こっていた。
ブーツの靴底に張り付いていた瓦礫が落下したのである。こいしにしてみれば気に留めるまでも無い小さな物だが、人間側からすればとてもたまったものではない。靴底に鉄板のようになって張り付いた車、凹凸に挟まった木材、鉄骨。それら膨大な質量をもった残骸が、上空百メートル以上から降り注ぐのだ。
それはまるで、爆撃の様相を呈していた。
けれども、こいしがやりたいのはこんなしょぼくれたものではない。爆撃なんて、人間でも真似できるようなちゃちな破壊ではない。

「えいっ！」
天が落ちる。昼間だというのに、周囲を闇に塗りつぶして、硬く冷たいブーツの底が降ってくる。視界がそれに覆われてもまだ、まだ大きくなる。
そして、二百メートルほどのブーツが町の区画とまるっきり置き替わるのだ。家も車もバスも電車も人もヒトもひとも……そこにあるもの全てを上書きして、地図を靴底の刻印に書き換えて。重々しい音を立て、彼女のブーツが地面に沈み込んだ。
そしてその大破壊は、壮大な上書きは。サクッという小さな感触になってこいしの足へと伝わるのである。
「ふふ、あはははは！　私の足の下で、どれくらいの人が死んじゃったのかなぁ？　百人？　二百人？　もっとだよね。けど、これじゃぁよく分からないね」
こいしは再び屈み込んだ。ブーツの周囲は、こいしの一歩の影響を受けて酷く荒れている。直接踏み潰したわけでもないのに、衝撃に耐えかねて多くの家屋が全半壊の被害を受けているのが分かった。そしてそこから先の、まだ綺麗な町を、人間たちが右往左往し逃げ回る。
「本当に必死で可愛い……いじめたくなっちゃうよ」
クスクス。噛み殺すように笑いながら、こいしはパチンとブーツの止め具を外した。自分のブーツが町に対してあまりにも大きすぎ、留め具を見れば町のピントが霞む。
「どんなに逃げたって、絶対に間に合わないのにね」
立ち上がり、そしてブーツからするりと足を抜く。靴下を引っ張って脱ぎ去れば、蒸れて熱い足に心地良い風が感じられた。
雪のような肌。足全体が、もはやひとつの山のようであった。それも、飛び切り美しい霊峰。
一番大きな尾根は、控えめで可愛らしいくるぶし。そこから弓なりに引く踵へのラインは荘厳に切り立ち、人々に魅せ付ける足の裏は、若々しい美しさと張りに満ち溢れている。視点を変えて空から見れば、滑らかな足の甲。その先にはふっくらと、柔らかそうな指が並ぶ。
どれをとっても美しく、そしてどれをとってもあまりに大きかった。そのパーツの一つをとっても、人間など比べ物にならない。
これから、この足で人間たちを直接踏み潰すんだ。
急き立てる興奮。体の奥底からうずうずと湧き上がってくる支配的、破壊的な衝動がこいしの呼吸を浅く速く誘う。

だってブーツ越しでもあんなに愉しかったのに。裸足で町を、人間たちを踏んづけたらどんなに気持ちいいんだろう！
「それじゃぁ、踏むよ？」
もったいぶるように、もじもじと親指と人差し指を交差させる。それはまるで怪物が獲物の品定めをしているかのようであった。足の指。こいしにとっては体のほんの一部分。けれどそれでさえ人間にとっては手に負いかねる大怪獣なのだ。
そんな怪獣を5匹も従えた足本体が、いよいよ降下を開始した。
まずは指が、小さな、こいしにとって一センチにも満たない家々を押しつぶして大地に降臨する。
それは家に触れると、一切の抵抗を許さずに圧し掛かり押しつぶした。できたことと言えば、骨組みを砕かれて破壊されるその一瞬に悲鳴を上げることぐらい。それも、崩壊なんて生半可なものではなくって、必要以上のエネルギーを受けたことで爆ぜるように消し飛ぶのだ。
けれどまだ、愉しいのはこれから。
こいしは桜色の唇に甘やかな笑みを浮かべ、ゆっくりと足を地面につけていく。
「きゃっ！　くすぐったい～！！」
足の指の間。神経の集中するそこに囚われた家が爆ぜたのだ。それは今や無敵の巨大娘たるこいしにもしっかりと伝わる。
そしてなにより、人間たちが不動の防壁として築いた家が自分の足の指の間で僅かな快楽を与えて崩れ去ったという事実に、嗜虐心が刺激されるのである。
そして、なにより人間そのものを感じるのだ。足の指の間に、あるいは足の裏に。こんな状況になってもなお生にすがり必死で逃げ出そうともがく人間たちの手足を感じるのだ。
「あああぁ、いいよ……ぞくぞくしちゃう。ねぇ、もっと暴れて？　その小さな、可愛い手足で私の足の裏を気持ちよくしてよ。そうじゃないと……」
ぐぐぐっ、足の裏に徐々に乗せる重み。それは足の自重であったが、しかしその自重すらも受け止められないであろうことは明白だった。
こいしから見て体長一・五ミリほどの小人たちが、足の裏でプチプチと弾けて瓦礫に混ざるのを感じ、こいしはぶるるっと身震いした。建物がはじけ飛ぶのなんかよりも、ずっと強烈な快感が脳を貫く。
物理的には、本当に弱い刺激だったと思う。けれど、足の裏で実際に感じる

以上に強い刺激が、まるで嵐みたいに駆け抜けるのだ。
どうしてだろう。こいしは唇に人差し指を当てて可愛らしく首をかしげ、ちょっと考えてみる。
人を踏み潰す。残酷な快感。現実世界では決してやってはならない、背徳の快感だ。
そして、それは自由と万能感の快感。無意識に縛られ心の中に閉じこもった少女に与えられた、ただ一つの自由。
けれど、こいしの興味はそんな結論が出る前にそれてしまった。自由奔放なのはどうやら本人の気質らしい。
「あらら？　近くで誰かが眠りについたかな？」
こいしの世界に一瞬生じた揺らぎ。幾千人もの他人の無意識とリンク中のこいしの夢は、近くの者の無意識の動きに敏感に反応するのだ。
だれだろう。姉だろうか、それともペットの猫だろうか。
普段はあまり誰かが近くで眠ることなんて無いから、きっと居眠りだ。
そんなところまで考えて、こいしはにやりと唇の端を吊り上げた。折角だからその誰かを夢の中に連れ込んで遊んでしまおうと思ったのだ。
「ふふっ、おいで、おいで……」
リンク成功。距離が近いだけあって、かなりの精度で同じ世界が見れるシンクロ率で呼び出せた。
腰の辺りまである艶やかな、けれど無造作な黒髪。そして、その背中には漆黒の翼。背は高くスタイルも良いが、どことなくあどけなくて、幼い印象を残した顔。
透明なレイヤーの濃度が上がるように、うすぼんやりと浮かび上がった少女はあまりにも特徴的で、すぐに誰と判断がつく。
霊烏路空。古明地さとりのペットの地獄鳥だ。
「お空、あなただったの」
話しかけるこいしに、夢の世界で目覚めたばかりの空は眠たそうな眼をぱちぱちとやって振り返る。
「ん……うにゅう？　あれ、こいし様。おはようございます」
当然と言えば当然だが、空はここが夢の世界であると気がついてはいない。
「おはようお空。よく眠れたかな？」
よしよし、これは面白いぞ。とばかりにこいしは笑みを浮かべて、空のほうに話を合わせる。
そんなこいしに、空は一抹の疑問を感じた。
「こいし様、なんかいつもと雰囲気が違いませんか？　なんというか、はっきりしているっていうか、存在がぼやけてない……？」
普段のこいしといえば、無意識に縛られてふらふらと行動している、あまり人から認知されない曖昧な存在。それとのギャップが違和感の正体だった。
「そうかな～？　きのせいきのせい」
こいしはそんな空の疑問を軽く流した。ここで真面目に答えると小石のやりたいことに若干支障が生じるからだ。
「うーん、そうですね。ところでここはどこなんですか？」
「ん～？　わっかんないな～」
こいしは現実世界で彼女がいつもするように、にこやかに笑って答える。
足元に広がる小さな箱、はこ、ハコ……。小さいものから大きなものまでよりどりみどりのバリエーションが所狭しと並んでいるその様は、空の知識に該当するものが一切無かった。遠めにみると彩度を失って灰色に見えるその箱たちの中に、ちょいちょいとコケが盛り上がって生えているのが見える。
「ところでこいし様、どうして片足裸足なんですか？」
「え？　うん。こっちのほうが気持ちいいからだよ？」
そこは、正直に答える。だって、折角だからお空にはこの快感を精一杯味わって欲しいのだから。そして、その後で……。
これからすることを考えると、今から笑みが止まらない。
「気持ちがいい、ですか？」
「そうそう、お空も脱いじゃいなよ」
――まぁ、嫌とは言わせないけれどね。
パチン！　こいしが指を鳴らすと、空の靴は、そしてそれを覆っていた放射性物質の象の足は弾ける様にして壊れてしまった。ここはこいしの夢の中。森羅万象、有象無象の全ては、こいしの手の中にあるのだ。空の靴を脱がせることなど、何の造作もありはしない。
「うにゅ！？　こいし様、今何を……！？」
「気にしない気にしない。ほら、ちょっと歩いてごらんよ」
紅玉の瞳をまん丸にして驚く空の手を引いて、こいしはずっしんと一歩踏み出した。それに連れられて空が半ばよろめくように足を踏み出す。
「ひぁっ！！　なにこれ、だめぇっ！！」
足の裏に感じるハコたち。それらがプチプチと潰れる感触。こそばゆく、く

すぐったく、しかし体の心を貫くような強烈な感覚に思わず手を振りほどき、空は縮こまる。
「どうぉ？　気持ちいいでしょ？」
「くすぐったい……けど、はい。気持ちいいです」
空は立ち上がって頷いた。
これは、入ったな。こいしは笑顔の裏側で考える。多分、放っておいても空はこのまま町を沢山踏み潰して遊び始めるだろう。
「うんうん、気持ちがいいのはいいことだからね～。もっと歩いていいんだよ？」
「いいんですか？　壊しちゃってるみたいですけど……」
「いいのいいの。その気になればいくらでも用意できるんだからね」
こいしが可愛らしく首をこくりと振ると、その愛らしさに安心したのか空はそろりと足を持ち上げた。
その様を、いかにも愉しそうにこいしが眺める。
長く白く美しい空の足が、瓦礫を引きずって空へと持ち上がる。こいしのものよりもずっと大人びていて、魅力的な美脚。一度成長期を向かえて伸び、再び整った脹脛は滑らかな弧を描き隆起している。大人の体を支えるためにしっかりとした腱が２本、柔らかそうな窪みと対比を成すひかがみ（膝裏の窪みのこと）。スカートの闇の中に消える太股は適度に脂肪を蓄えて、太すぎず細すぎずの絶妙なむちむち感をかもし出している。
男性ならば、誰しもが手を這わせたくなるような美脚。それが、いよいよ動き始めた重心を支えるために町に降り立つ。
やわらかそうな指が行儀よく並んだエジプト型の綺麗な足。そんな彼女の可愛らしく美しい足が、町を破壊して降臨するのだ。
――そこにいる、ちゃんと中身の入っている人間達を踏み潰して。
そう思うと、見ているだけのはずのこいしの体にゾクゾクと快感が走るのだ。
まずはマンションが砕かれる。そして、次に低層住宅が煙に飲まれて消えていく。鉄が曲がる音、木材が折れる音、石が砕ける音。そしてなにより、人間たちが声も枯れよと叫ぶ断末魔。全てが折り重なり、壮絶な最後の悲鳴の大合葬を奏でるその様はまさに壮観。
けれど次の瞬間には全存在をかけたその悲鳴すら飲み込んで、空の足が全てを塗りつぶす。後に残るのは砂煙と、遠く低く強く鳴り渡る地響き、地震だけ。
「ひぁう！　うにゅぅ……やっぱり気持ちいい……」
それだけの破壊をやってのけた空の淡白な感想に、こいしはぶるると身震いした。この温度差。何百もの人間を踏み潰し悪夢の底へと叩き落した少女は、頬を桃色に上気させてうっとりと呟いている。
――最高だよ。本当に素敵。あれだけの人間を踏み潰して気持ちよくなっちゃうなんて。
残酷な快楽に身をやつし、ぞくぞくとその快感を楽しむこいし。対して、何も知らずに快感を求めてそろりそろりと、一歩一歩確かめるように歩く空。その足元では、幾千もの人々が必死に逃げ回っているのだ。
けれど、そう。
こいしはこれだけでは満足しなかった。せっかく空が来たのだから、ちょっと彼女もいじって遊ばなければ勿体無い。
「ねぇ、お空。ところでさ、ここがどこだか本当に分からない？」
既に何歩も歩いている空に問う。笑顔で、けれど含みを持たせた微笑で。
「え……こいし様は知ってるんですか？」
「どうかな～。けど、ちょっと足元を見てみれば分かりそうなものだけどね～」
こいしに言われ、しゃがみ込んで足元の箱を観察する空。目を細めて箱に焦点を合わせると、その近くをわらわらと動き回る何か。
虫、ではない。
空の鳥の目は光さえあれば人間よりもはるかに利くのだ。それらの正体を見紛うはずが無かった。そして、だからこそ彼女は混乱に陥る。
「え……これ……え！？　こいし様、これ……」
あまりのことに言葉を失い、助けを求めるようにこいしのほうを見る。けれどこいしはそんな空の願いとは裏腹に、にっこりと笑って一つだけ頷いた。
「う……うわ……いやだ、わたし……こんなの……！！」
紅玉の瞳に、大粒の涙が浮かび上がる。自分が何をしていたのか今更知らされて、酷い絶望に打ちひしがれている様がはっきりと分かった。
それはそうだ。最悪の後出しじゃんけんなのだから。こいしだって、もしこれが夢と知らずにこんなことをされたら泣き崩れる。
けど今はもう少し空を泣かせて、その可愛らしい泣き顔を堪能したかった。
「ねぇ空。どうだった？　大怪獣になった気分は」
「やめてください……」
しゃがみ込んだまま両手で顔を覆い、空は嗚咽を漏らした。その手の間から、ぽろぽろと水滴が零れ落ち、爆撃のように市街地に降り注ぐ。
「あなたの綺麗な足がさ、沢山の人たちを踏み潰すところ、とっても良かった

よ？　こんな風にさ」
　ずっしん！！　わざと、泣き崩れる空の目の前の区画に足を踏み下ろす。建物が粉々に破砕され、踏み下ろされた足の周囲でさえ無事ではいられないその様を、空は指の間から見てしまった。
　建物が壊れる音、そしてそれを突き破って聞こえる人間たちの悲鳴。
「やめ……て……」
　消え入りそうな声で、空は懇願するようにうめく。それをとめる権利なんて自分に無いことは分かっているから、余計に辛い。
　こいしがつま先でぐりぐりと町を踏みにじる様を、ただ見ていることしかできない。こんなに大きな体を持ちながらにして。
「目を逸らしちゃダメ。あなたがやったことだよ？」
　こいしは空の手をそっと掴んで、顔から引き離す。抵抗はなかった。
　その下の泣き顔は絶望に、そして怒りと悲しみに塗りつぶされていて、それでも彼女はとても可愛らしかった。
「けど、私ならこれくらいはやっちゃうかなぁ～」
　すとん、とこいしは腰を落とした。強力なダウンバーストが圧縮波となって街を駆け抜け広範囲を薙ぎ、そして次いで降ってくるこいしの尻が道路に囲まれた二区画ほどを押しつぶしてそこに鎮座した。逆座、つまりは女の子座りで座り込んだため、その知ろう輝かしい太股が、腹腔が、町を抉って山のように横たわっている。
　そして、あろうことかこいしは空の目の前でさらに腰を落とし、下着を町に押し当てた。
「ふふっ、みてごらん？　女の子がこんなことをしているのに、この町の男の子達は私に絶対に手出しが出来ないんだよ？　面白くない？」
　スカートをまくりあげ、空に足の間の惨状を見せ付けるようにする。それでも足りず、こいしはその股をすりすりと町に押し付け、すり潰して見せた。
　引きずりこまれるようにして建物がこいしの下着と地面の間に消え去り、土ぼこりだけが残る。同時にそこにいたであろう小さな小さな人間達を消費して、こいしは天に轟く喘ぎ声を上げた。
「やめて……もうやめて！　ごめんなさい、ごめんなさい……！！」
「だれもあなたを責めたりしないよ？」
「ごめんなさい……こいし様、もうやめて下さい……私は、これ以上……」
　ぼろぼろと涙をこぼして懇願する空を見て、もうそろそろ可哀想かなとこいしは思う。もう十分泣き顔も堪能したし、いい加減ネタばらししてあげようかな、と。
「お空。あなたはとっても優しい子なんだね。大丈夫だよ、あなたは誰も殺していないから」
　こいしは立ち上がると、空の手を引いて立ち上がらせてそっと抱きしめた。こいしよりも身長の高い空が、背中を丸めてこいしの肩に顔を埋めて泣きつくその様は大変に可愛らしい。
「ほんと……ですか？」
「本当だよ。あなたが人を踏み潰したのも本当だけれど、あの人たちは死んだわけじゃなくって眠りから覚めただけだから」
「眠りから……？」
「これは夢。夢の世界なんだよ。確かに普通の夢とは違って、私たちの足元にいる人たちは全員中身が入ってるんだけどね」
「なんだ、夢かぁ……よかったぁ」
　心底安心したように深く重いため息をつき、空はこいしにうなだれかかった。その些細な動きで足元の町がまたすこしばかり踏み潰されるが、もうそれも気にすることも無い。
　もしかするとこれは、こいしが空を安心させるためについた嘘なのでは？と空の頭に疑念が過ぎる。けれどそれはないと、すぐに確信した。
　こいしがこんなにはっきりと喋れる筈がないのだ、現実ならば。もっと、彼女の意思というのが薄くて、見えない。その存在すら消え入りそうで、常に眠っているような……自分のない少女。そんな少女が古明地こいしだ。とすれば、彼女が自由に振舞えるここが夢の世界というのも納得がいく。
　そんなこいしのことを、空は不憫だと思った。しかし同時に、ペットが主人のことを哀れむなんてことはあってはならない、とそんな考えを振り払う。
「どうせ夢なら、ちょっとくらい暴れてもいいですよね？」
「うん、いいんだよ。お空の好きにしちゃって」
　空はこいしに回していた手を解いて、そして背筋を伸ばしてあたりを見回す。夢と分かった途端に、泣いていた時とは真逆の感情が意識よりももっと深いところから湧き上がってくるのを空は感じた。
　なんだかんだで気持ちよかったのだ。
「じゃぁ、じゃぁもう一回大怪獣になってもいいですか？」
　心拍は速く、呼吸は浅く。興奮に渇く喉は、あの行為をもう一度求めていた。

「もちろん、いいよ。どんなに壊しても、何回でも作れるし、人間だっていくらでも呼べるから」
作り直すまでも無いかもしれないけれど、とこいしは付け加えた。町は大きな二人からみてもまだまだ広く、そしてなによりこいしにとっては作り直すのが勿体無いものであった。
足跡。空の、そしてこいし自身の刻んだ破壊の跡が、また興奮を引き立てるのだ。
「うにゅっ、うにゅぅ……あぁ、町ふみふみ気持ちいいよぅ……」
さっきまでとは打って変わって、快楽に身を投げてふにゃふにゃと言葉を紡ぐ空。誇張でもなんでもなく、本当に心地が良いのだろう。夢の中では、神経伝達物質の放出量が大幅に増える。つまり、現実世界の数倍気持ちがいいのだ。
「そう、もっと無意識の欲求に身を任せていいんだよ？　ここは夢なんだから、お空がしたいようにすればいいんだよ」
「私の、したいように……」
まさに夢見心地といった様子で空はこいしの言葉を復唱した。
「そうだよ。あなたは何でもできる、何をやっても怒られないんだよ」
「なんでも……」
なんでも。たとえば残虐な楽しみに身をやつしたとして、ここは夢の中なのだ。ならば、そういうのも面白いかもしれない。
強い力を持ちながらにして優しさを兼ね備える空の心が、次第に傾いていく。
自分の足元にはたくさんの人間たちがいて、少しでも生きながらえようと必死で逃げ惑っているのだ。それを弄んだとしても、だれにも迷惑はかからない。
「なら……」
空は逃げ惑う人々の中に足を踏み出した。区画ごと踏み潰せてしまう彼女の巨大な足が、空から離れようと逃げていた人々をほんの一歩で跨ぎ越しその行く手を塞ぐ。
けれど彼女の足は完全に地面についてはいなかった。踵を持ち上げ、つま先だけが地面に接触するようにしているのだ。もちろん、それだけでも人間の行く手を塞ぐのには十分。空の足の指一本ですら、片側四車線の道路に収まらないのだから。
「こうして人間さんたちをゆっくりいたぶるように踏み潰しても誰も怒らないってことですよね」
ゆっくり、ゆっくりと足を地面につけていく。一度にたくさん踏み潰すのよりは快感が少ないけれど、これにはそれとは違った愉しさがあった。
足の裏に確かに感じる倒壊の感触。少しずつ、けれど確かに町を壊しているという実感とともに、その町を人間たちが必死で逃げ回っているのがわかるのだ。
アリが肌を這えばわかるように、空から見てわずか一ミリ前後の人間であれ触れれば確かにその感触がわかる。こと夢の中とあって鋭敏に研ぎ澄まされた感性であれば、本来なら感じ取れないほど微細な手足の感触までしっかりと捉えることができる。
家々が足の裏で押しつぶされ、人間を追い立てる。人間は必死で逃げるけれど、それでも空の巨大な足からは逃げ切れない者たちは多い。その狙いの中央付近にいた者、あるいはつま先の近くにいた者はどう足掻いても間に合わないのだ。
けれど、彼らは助かろうとして必死で逃げる。たとえ空の足と地面の間に挟まれても、体がつぶれない限りはもがき足掻くのだ。
その必死さ、生きたいという切望。それを町ごと踏み潰してしまう。現実では決して許されないような残虐な行為に、空の無意識は興奮を覚える。自分の力に酔い、高潮した頬に愉しそうな笑みをたたえて。大怪獣空は無邪気に残酷にその興奮を貪った。
「あはは、本当に必死なんだね……それもそうか。けどね、逃がさないよ」
たった今空の足の下から逃れて胸を撫で下ろしていた人々に、愉しげな声が突き刺さる。だが、それに気がついたときには既に手遅れ。空の足はぐりぐりと地面を踏みにじり、彼女の足の下から逃れた人間たちを家も車も一切合財轢き潰す。最期に抗う人間たちの悲痛な抵抗が、プチプチと足の下に消えた。
その感触を確かめ、空は目を細めてクスクスと嗤う。幼さの残る顔ではあるが、嘲る様に、噛み殺すように嗤うその表情には大人びた色っぽさも感じられる。妖怪としての表情だ。人間に恐怖を与え、畏怖を集める妖怪の。
だから彼女は今、自分から逃げるものがあれば容赦しなかった。容赦なく追い討ち、そして逃げ場などないという恐怖を植えつけてやるのだ。
空は自分から遠ざかるように走る列車を見つける。町を分断するように走る軌道は敷石で茶色く、そこを走る十両編成の立派な車両はいかに細いとは言えどやはり目を引くものだ。
車両の速度は時速百キロメートルを優に超えていたが、しかし空はそれを軽々とまたいで追い越す。なにせこの大きさだ。彼女の移動速度は音速すら超

える。
　けれど彼女はそのまま列車を踏み潰すことはしなかった。彼女の足は軌道のすぐ隣の家々を踏み砕いてそこに降り立つ。もちろん、山にも匹敵する体重移動、その振動に耐えられるはずもなく列車は脱線して転がることと相成った。あとは煮るなり焼くなりやりたい放題だ。
「あははっ、つかまえちゃった！」
　空は足の指を器用に操り、十両あるうちの真ん中辺りを親指と人差し指で挟み込む。まるで豆腐をつかむような絶妙な力加減を要求されるが、そこは烏というだけあって足の扱いは一流であった。
　そのままそーっと足を持ち上げると、ほかの車両も持ち上がる。今頃中の人間はどうなっているんだろ、などと考えつつ空はさらにそれを高く持ち上げてみた。
　するといよいよ連結部が加重に耐え切れなくなり、金属のねじ切れる歯の浮くような音を立てて落下してしまった。その距離は空からみればほんの数センチであったが、人間視点で見れば数十メートルにも及ぶ大落下だ。当然車両は蛇腹にひしゃげ、中の人間たちは息絶える。
　けれどそんなものには目もくれず、空は足の間に挟まった車両に語りかけた。
「ねぇ、あなたたちは今、この箱ごと私の足の指の間に捕まっちゃってるんだよ。そっちから私は、どんな風に見えるのかなぁ」
　くりくり、指を動かして列車を弄ぶ。空から見てわずか二センチの列車が、指の間でめきめきと音を立て今にもひしゃげてつぶれそうだ。
「指の間ってどんな感じ？　あったかいの？　それとも、ちょっと臭い？　私もブーツを履くことがあるから、足のにおいには気をつけているんだけれど」
　返事はない。もしかすると仲の人々はもう既に気絶しているのかも、などと思ったが、そうでなくてもこの距離でこの大きさの違いでは、足の指の間にいる人間たち数十名の叫び声など聞こえるはずもなかった。
　けれど、その答えがないのに苛立ったのか、空は足の指をきゅっと握ってしまった。
　きゅううぅバキバキ……ステンレス製のボディーがひしゃげる甲高い音、それらが無理に折れ曲がり破断する音が空の指の間から漏れ聞こえ。それらが終わって空がぱっと指を開くとそこにあった列車は一枚の鉄板になって空の親指にへばりついていた。当然その中には人間が乗っていたはずであるが、まるでそんなものなんてなかったかのようにぺったんこ。そもそも厚みなんてなかったかのような見事な圧縮ぶりだった。
「ふふっ……つぶれちゃった。けど、気持ちよかった。足の指の間で何かを潰しちゃうのって、本当に気持ちいい……」
　そんな恍惚に浸る空の背中に、こいしの声がかけられる。破壊に夢中になって、こいしの存在を危うく忘れるところであった。
「うん、いいよね。けど、そろそろ新しい玩具をだしてあげるよ。私はこんなのもアリだとおもうんだ～」
　こいしは町の上に手を翳した。すると、そこの部分を中心に巨大な高層ビルが次々に生えてくる。あっという間に新宿並のビル郡が出来上がりだ。もちろん、巨大とはいえそれはどれもこいしのブーツの筒丈にも満たないものだったが。
「こうやってね、靴の中に入れるの」
　握るだけで壊れてしまいそうな砂糖細工みたいなビル。こいしはそれを器用に持ち上げ、自分のブーツの中にそーっと置いた。
　それを三回。危うげなバランスで、高さ百メートルもある高層ビルがこいしのショートブーツの中に並び立つ。こうして納めてみると丁度筒丈の高さくらいだろうか。
「はい」
　こいしはそのブーツを空に差し出した。こいしのブーツが空の足元に鎮座する。当然、ブーツのつま先にも満たないような雑居ビルやマンションをその下に敷き潰し、地響きを立てて。
「うにゅ、これは面白そうですね」
「面白いよ～。だってその中にいる人たちはどこにも逃げられないんだもの」
　空は何の躊躇も無くこいしのショートブーツの上に足を翳した。これから、ここにいる人たちを全員、ブーツの中で踏み潰すんだ……と、そう考えると呼吸が熱くなる。ブーツを汚れた素足でそのまま履くという行為にもすこしばかりの背徳的な興奮を感じているかもしれない。ともかく、そんな興奮も手伝って空の胸は高鳴った。
「ふふ……女の子のブーツの中に入れられるって、どんな気持ちなんだろう。それで、そのまま女の子に履かれちゃうなんて」
　空はブーツの筒の入り口で足の指をぐにぐにとやって中の人々を煽った。それだけで、ブーツの中のビルからは小波のような悲鳴がざわわーっと伝わってくる。

それが愉しくて、さらに空は煽ってみることにした。
「逃げてもいいよ？　逃げられるならね。どこまで行ってもブーツの中だろうけど」
それでも、人間たちは必死で走り出す。ここが夢の世界と気がつきもせず、助かるために精一杯だ。
「可愛いなぁ、必死になっちゃって。無駄なのにね」
いよいよ、そのつま先がビルに触れる。ショートブーツだから、靴の中に足を差し込むためには先にビルに足があたることになるのだ。
ビルの最上階が何の抵抗も無く数階層に渡って砕け散り、そして重さに耐えかねた基底部が崩壊。するとどうなるかと言えば、空が直接触れた最上階からではなく、一番下から靴の中敷に飲み込まれるようにして崩れていくのだ。
靴の中にグランドゼロを作り出した空の足はゆっくり、ゆっくりとそのまま下りていく。逃げるだけの時間を、希望を与えるようにだ。
もしかすると、つま先のほうまで行けば助かるかもしれない。そんな淡い希望を抱いて人々は駆ける。
けれど、その必死の努力は一切が無駄であった。このブーツはこいしのものなのだ。空の足が納まるにはあまりに小さく、つまり彼女の足はむりやりブーツを押し広げながら入ってくる。一メートルの隙間すらない。それはまるで巨大なプレス機。それも、ビルを一枚の砂岩に変えてしまうほどの。
「あはは、こいし様ぁ。靴の中で私の足に人間さんがぴったりくっついて……足を進めるとそのまますり潰されちゃうのがわかりますよ！　すっごく楽しい！」
靴の中で指をもぞもぞと動かせば、ブーツの上からでもその様子が分かるほどに空の足とブーツの内側は密着していた。当然、そんなことをされれば中の人間たちは無事ではすまない。
けれど人間の生存本能と言うのはなかなかに見上げたもので、こんな状況になっても決して生きることを諦めないらしい。
今の今まで人間を散々あおって優位に立っていた少女の表情が一転する。
「……ひあっ！？　あ、あ、足の指の間に……人間さんがっ！　だめ、暴れないで！！　うにゅうぅぅ！！　おねがいっ、だからぁっ！！」
ずっしん、ずん、ずしん！　小刻みな大揺れを伴って、空が片足でぴょんぴょんと跳ね回る。ブーツに収まった右足を持ち上げて、どうやら脱ごうとしているらしいが何せこいしのブーツはサイズが小さい。当然簡単には抜けてくれない。それに加えて、足の指の間でもがく人間のせいで、感覚が鋭敏になった夢の中ではとてもではないが落ち着いてなんて出来ない。
「あ～、この大きさだと家も入っちゃうからね、足の指の間って。どんなにぎゅーってしても人間の一人や二人は入るよね」
こいしはそんな彼女の様子を楽しそうに見守る。
「うにゅうぅぅ、だめぇっ、こいし様ぁ、なんとか……」
「説得してみたら？」
「あっ、あぁぁっ、ふぁ、せっとく、えと……私の足の指の間にいる人！　たたっ、助けてあげるから、なんでもするから動くのやめてぇ！！」
今なんでもするって言ったよね？　とばかりに、動きがぴたりと止まる。
とりあえず一難は去ったと、半ば涙目の空は一息ついてこいしのブーツをそーっと脱いだ。
足の指の間を見ると、なるほど確かに人間が一人その間に挟まっている。
「えっと、とりあえず生還おめでとう？」
空はその人をビルの屋上にそっと移動してやり、話しかけた。あまりに小さくて顔も良くわからなければ、何を言っているのかもあまり聞こえない。
「うわぁ、この人結構な猛者だよお空」
けれど夢の主であるこいしにはその内容がはっきり聞こえているようだった。
「あのね、私たちがビルを巻き込んでキスするところが見たいって。モノホンだよこのひと、ガチだよ」
「へぇ、そういう人もいるんですね……って、キスぅ！？」
ずしん、がらがら！！　空はあまりに唐突なこいしの、というかその人の発言に度肝を抜かれ、尻餅をついた上でずるずると後ずさった。無論盛大に土ぼこりと破壊の後を引きずってだ。
「なんでもするって言ったよね？　だってさ」
こいしはどうやら乗り気らしく、もう既にその手中にビルを一本収めている。
「だだだだめです！　私は女ですよ！？　こいし様も女の子でしょ、だめ、そんな」
「今の時代性にもいろいろな考え方があっていいと思うよ～？　ほらほら、ちゅーするだけなら大丈夫だから。先っぽだけならへいきだからさ～」
尻餅をついたのがいけなかった。町を踏み潰しながらずしんずしんと歩み寄るこいしから逃げることが出来ない。なんだか、目を逸らして背中を見せたらその瞬間負けな気がする動物的な本能が働いているのだろうか。

空の両足を膝でがっしりと押さえて膝立ちになるこいし。逃がすつもりが一切無いことを示していた。
「それにほら、これ私の夢だから。ビルの味をポッキーに変えれば大丈夫だから」
「そういう問題じゃうにゅうううぅ！？」
空の言葉を遮ってこいしはビルの根もと側を口にくわえ込む。そして有無を言わさず空の唇にビルの屋上側を押し当てた。
咥えればキス、咥えなくてもおそらくこのままこいしの唇にビルが潰されてキス確定ルート。いよいよ逃げ場が無いと知って観念したか、空はビルの屋上側を咥える。本当にチョコの味がした。そういう問題じゃないけれど。
小さく嘘ぎ声を漏らして、ぱりぱりとビルを破砕しながらこいしの唇が近づく。桜色の可愛らしい、しかし横幅三十メートルはありそうな巨大な唇。
こいしは確かに美少女だ。悪い気はしない。けれど、だからこそ。こんなに感じやすい状態でキスなんてされたらおかしくなってしまうかもしれない。そんな懸念に、ビルを一口もかじれないまま空はこいしを待った。ひどいワンサイドゲームだ。
そして二人の間にあったビルを全て口の中へと運んだ唇がいよいよ空のそれと重なる。
「んんっ！？　んん～、ん～！！」
空はぎょっとして目を見開いた。慌てて手をじたばたやってこいしを引き剥がそうとするが、ここは彼女の夢。こいしの望まないことは実行してもうまくいかないのか、全く持ってこいしの体は持ち上げられなかった。
でも、酷いじゃないか。先っぽだけって言ったのに、こいしの舌は空の唇を割ってそのなかに入り込んできたのだ。
嫌じゃない、嫌じゃぁないのだけれど。だめだ、このままでは本当にこいしに心が奪われてしまいそうで。
そして、こいしの舌が空の舌に絡む。プチプチとはじける感触は、ビルの中にいた人間たちの命が散る感触。
その感触にぞくっと身震いし、空は肩をすくめた。その肩がゆっくりと降りる時には、もう既に彼女の心の壁はこいしの舌に完全に突き崩されていた。
もういいや、夢だし。逆に考えるんだ、あげちゃってもいいさと。
「ぷっ……はぁ……」
長い長いキスの後、こいしの顔が離れる。その頬はすっかり桃色に紅潮し、彼女自身もだいぶ興奮していることが伺えた。
「ねぇ、空。私……こんなんじゃ満足できないかも」
甘えるように、ねだるように。山のような空の胸に顔を埋めてこいしは言った。その言葉の意味は空には分からなかったけれど、同時に空の中でも何か歯止めが利かなくなっていることだけは確かで。
「こいし様……私も」
その腕は無意識に、ぎゅーっとこいしを抱き返して彼女のスカートをめくり上げていた。何をしたいのか、自分でも分からないままに、欲求に任せて体が動く。
「けど、興奮しすぎたみたい……夢が覚めちゃう」
こいしが残念そうに呟く。そこで空は初めて、周囲の世界がだいぶぼんやりと霞んでいることに気がついた。
夢と言うのは脳が眠っている間の産物なのだ。脳が起きてしまえば、夢は覚める。ようするに、この世界ではここから先は出来ないのだ。過度の興奮は脳の覚醒を簡単に招く。
「こいし様ぁ、そんな、ここまで乗り気にさせておいてずるいですよぉ」
ぎゅーっとこいしの手を握ると、その感覚すら曖昧で空は思わず泣き出しそうになった。まるで彼女が消えてしまうかのような錯覚を覚えたのだ。
夢の終わりはいつも切なく、儚いものなのだ。楽しい夢は、目覚めてしまえばなんともいえない喪失感があるのは誰だって経験があるだろう。
「大丈夫、出来ないけれど、あなたの気持ちは分かってるよ。また明日の夜、一緒に遊ぼう」
薄れて行く空に微笑みかけ、こいしはその手を握り返した。世界が光の泡になって、蒸発するように壊れて行く。こいしが唯一自由であれる世界が。
「いつか、向こうの世界でもこんなことができるといいですね……うぅん、違った。いつか必ず、私がこ――し様――た――けだ――から――」
ほとんど聞き取れないぼやけた声。それが消えると、こいしは真っ暗な空間にただ一人佇んでいた。
「ありがとう、お空。私待ってるよ」
数千人もの夢を束ねて世界を作った少女が、夢の世界で眠りに落ちる。いつもより楽しかった思い出を抱いて。

〈終わり〉

あとがき

初めての方は初めまして、そうでない方はお久しぶりです。
ということで「東方＋サイズフェチ」本、まさかの第三弾です。
紆余曲折ありましたが参加者の皆様や友人達の力添えもあり、
無事発行することが出来ました。（当初の予定では 2013 年夏予定でした）

初めての方は「こういう世界もあるんだ」と見聞を広めていただければ、
サイズフェチ属性のある方には楽しんでいただければ、幸いです。
今回はこの本をお手に取って頂き有難うございました！

参加していただいた 白兎さん、Manzi-SS さん、sonnano さん、
イバラードさん、はちみつさん、アオイガイさん、かすこさん、
XNR さん、火山の楊さん、寺田落子さん、アルカリさん、レヴァリエさん、
色々と手助けをして下さった九七式北狐さんや Skype メンバーに
改めて御礼申し上げます。

それではまた、次の機会がありましたらお会いしましょう！

- 奥付 -

東方 project+ サイズフェチファンブック
【天真爛漫ギガンティック 3】

発行　：2014/8/17 [コミックマーケット 86]
製作　：CalmBlue [http://calmblue.web.fc2.com]
代表　：蒼凪 依翅 [yu1114.illustrator@hotmail.co.jp]
印刷　：株式会社 栄光 様 [http://www.eikou.com/]
原作　：上海アリス幻樂団 様

この作品の無断転載、複製、web 等へのアップロードを禁じます。

Editor

illust

Manga

Short story

CalmBlue
2014 SUMMER

この本は東方 project の二次創作作品です。
転載や Web などへのアップロードはお止め下さい。
COPY UPLOAD